

第3回「日中未来創発ワークショップin北京～未来の都市生活を考える」 企画運営スタッフレポート

東京大学教養学部
学際科学科
川口翔太郎

1. 今回のワークショップについて

今回、笹川平和財団の日中未来創発ワークショップに学生スタッフとして携わらせていただき、訪中に同行して中国の社会をこの目で見て、参加者たちと交流することができたのは私にとって得難い機会だった。

学生スタッフとして、事前にどのようなプログラムにするのが良いのか議論を行い、また当日はフィールドワークとディスカッションに同行して、日本側の参加者と中国側の参加者のコミュニケーションの仲介役になれるように努めた。

今回のワークショップのプログラムは、北京の街と現代の科学技術について探索するフィールドワークを行い、そこで見つけた内容についてディスカッションを行う、という内容である。日本側の参加者は「パンダ杯」という中国についての作文コンテストの受賞者たちで、中国側からは北京大学や北京外語大学の日本学科の学生が参加してくれていた。そのため、時には中国語を交えつつ、基本的には日本語でワークショップは行われた。

2. 【北京の街の印象】

フィールドワークに同行して、私が一番驚いたのは高度なIT技術が社会に実装されている様子である。中国ではキャッシュレス決済が発展してほぼ現金を触る機会がない、ということは日本にいても耳にする機会のある話だが、他の場面でもデジタル技術が社会に浸透しているのを実感した。

例えば街中のいたるところに置いてあるシェアサイクルは、WeChatやアリペイなどのアプリでQRコードを読み取るだけで自由に使うことができ、観光地にある看板にもQRコードが配置されていて、それを読み取るとそのスポットの解説音声やウェブサイトアクセスできるようになっている。また、スマホアプリを用いれば食べ物のデリバリーや配車サービスなどに即時にアクセスでき、それらのサービスはいずれも安価で即座に使えるのだ。電車のチケットや観光地に入るための予約なども、WeChatのようなアプリに集約されていた。

もっとも、私たちにとっては不便を感じる場面もあった。上記のようなサービスの多くは、中国の銀行口座を持っていることや国民IDを持っていることが利用の条件になっていて、そういったものに日本からの参加者はアクセスすることができなかった。今回のワークショップでは中国側の学生がホストとして親身になってサポートをしていたので、そのような不便が問題

になることはなかったが、単身での旅行者にとってはかなり困ったことになる場面も多いだろう。

中国国内でも、中国の銀行口座が無かったり、お年寄でスマホの扱いが難しかったりする人が、「デジタル難民」として移動や施設の予約が困難になってしまうことが社会問題化している、という話を教えてもらった。このような高度なIT技術への社会への実装とそれに付随する問題点の様子は、今後の日本社会の在り方を考える上でもとても参考になるのではないだろうか。

3. 【ディスカッションと発表】

フィールドワークの後には、班でのディスカッションである。壁に貼った模造紙に、「中国の街のフィールドワークをしていて印象的だった部分」と「面白かった技術」を記入した付箋を貼り、付箋を動かしながらそれらのかけ合わせを考えてみてもらう、という進め方でディスカッションを行った。この進め方はうまく機能して、言葉のハンデがあるなかでも、「これも面白かった」「こういうアイデアがある」などと活発に発言が出て、その中で日本側の参加者、中国側の参加者共にお互いの考え方の違いに触れる機会になっていた。

面白かったのは、このような「壁の模造紙に付箋を貼って、それを動かしながら考える」という形式のワークショップのやり方自体が、中国の参加者にとっては目新しいものだったらしいということだ。日本にいればこのような形式のワークショップに参加したことが一度はあるのではないかと思うが、彼ら彼女らはこういったやり方は初めてだと興味深そうにしていた。こういった違いに気付けるのも、異文化交流の面白さかもしれない。

4. 【「漢字」という共通点について】

このように、いろいろな面でお互いの興味深い「違い」を見つけることができたが、一方でお互いに似ていると感じる部分も多かった。例えばフィールドワークの道中では好きなコンテンツや音楽の話などで盛り上がったが、それ以上に、我々のコミュニケーションを後押ししてくれたものとして「漢字」がある。

日本人は、中国の街を歩いていて、そこにあるほとんどの言葉が「読める」のだ。どこに行っても「あれはこういう意味でしょ」「この文字はどういう意味？」というような話題で盛り上がっていた。

中国側の参加者もその点を印象的に感じたようで、私に以下のような感想を送ってくれた。

「我发现很多日本人对中国的文化和语言感兴趣，这让我感到非常特别。最近经常能看到“东亚文化圈”、“汉字文化圈”的概念，而只有中国和日本是还在使用汉字的国家。从这一点看来，我们的文化关系很近，我们心的距离也应该越来越近。虽然我不敢说我能在中日友好方面做出什么样的贡献，但我会努力继续学习日语，了解日本的国情和文化。我希望以后能够向我身边不了解的人介绍我所看到的日本，改变他们的刻板印象。」

（多くの日本人が中国の文化や言語に興味を持っていることがわかり、とても特別な気持ちになりました。最近、「東アジア文化圏」や「漢字文化圏」という概念をよく目にしますが、現在

でも漢字を使用している国は中国と日本だけです。この点から見れば、私たちの文化的な関係は非常に近く、心の距離もさらに縮まるはずです。私が日中友好にどのような貢献ができるかは分かりませんが、これからも日本語の学習を続け、日本の国情や文化を理解できるように努力していきたいと思います。そして将来、私の周りの日本を知らない人たちに、私の見た日本を紹介し、固定観念を変えていけたらと思います。)

このように、ふとしたところからお互いの共通点に気づいて一気に親しくなる、という経験ができるのは、やはり対面で顔を合わせてのイベントならではないかと思う。

5. 【日中交流のハードルについて】

私は東京大学で、日中交流に関する学生団体に所属している。その活動を通して思っていたのは、今回のような日中交流のイベントを開催するにあたっては、三つのハードルがある、ということだ。

一つ目は、「最近日中関係が悪化している」のようなニュースを耳にして形成される、「ひどい態度を取られたらどうしよう」「なんとなく不安だな」といった「心理的なハードル」、二つ目は、中国と日本の距離的な隔たりからお互いを知ることが難しくなっているという「空間的なハードル」、そして三つ目は、会ってやり取りをしようとしても、言語がネックになり得る、という「言語的なハードル」である。

しかし、一方で、これらのハードルはどんどん低くなりつつあるのではないだろうか。

空間的なハードルは、コロナ禍で中国政府が実質的な鎖国制度を撮っていたときは、本当に高いものだった。私の参加しているサークルでは、コロナ禍で渡航が難しかった時期はZoomなどを活用したオンラインでの交流を模索していたが、画面越しに相手と親しくなり率直な話をするというのは不可能ではないにせよ難しかった。しかしそのような政策の制限はなくなりつつある。

また、言語的なハードルが低くなってきている様子を今回のワークショップで私は目の当たりにした。私たちに北京を案内してくれた中国の学生たちは、日本語を会話に不自由しないレベルで話せるというわけではなかったが、とてもわかりやすく北京の観光地について解説してくれた。聞くところによると、事前に北京案内のための文章を作ってそれを翻訳サービスにかけて「予習」してくれていたというのだ。そのような準備を私たちのためにしてくれたことに頭が下がることは言うまでもないが、このような「予習」がしやすくなったのも翻訳技術の向上によるものだろう。また、最後のディスカッションでは、日本人同士が話しているスピードについていくのに苦労しているようだったが、スマホアプリを用いて、話している内容がリアルタイムで中国語に翻訳されるようにして、それを確認してディスカッションに参加していた。

もちろん、他の国のことを知ろうと思ったら、その国の言語を学ぶことは非常に重要である。中国に渡航するに際しては、最低限の言語能力はあったほうが良いだろう。しかし、そのような基礎的な言語能力と本人の熱意を前提としたうえで、そのうえで言語面がコミュニケー

ションを行う上でのネックになる場面では、それを補ってくれるような技術が次々に登場していて、しかもその精度は日進月歩である、というのを今回実感した。

このように、言語面・空間面でのハードルは、どんどん解消されつつある。そして最後に残る心理面でのハードルについては、思い切って助走をつけて飛んでみれば、それを超えるのは難しくないと思う。今回の事業でも、日中双方の参加者に、最初はいくらかの躊躇が見られた。しかしいざ話しだしてみると、好きなコンテンツについて、社会の違いについて、食べ物の好みについて…など、いくらでも話は尽きない様子だった。もちろん、時には考え方や感じ方の違いに突き当たることもあるだろうが、そういったことも含めて貴重な経験になるだろう。

6. 【おわりに】

世間では「日中の政府間の関係は類を見ない悪状況にある」というようなことが言われているのを耳にすることもあるが、一方で、「日中交流を行うための状況」について考えてみれば、それとは裏腹に、むしろ現在が今までで一番良い状況であると言えるのではないか。

このような実感が得られたのが、私個人としての、今回の笹川平和財団のイベントに携わったの一番の収穫だった。今後もこのようなイベントや計画に携わる機会があれば、それが良いものになるように今回の経験も生かして全力で取り組んでいこうと思う。

末筆ながら、このような貴重な機会を与えてくれた、財団、日中双方のイベントへの参加者、その他ご協力いただいた方々に深くお礼申し上げます。



図：故宮博物館前にて